

『^{五本}対照類聚名義抄和訓集成』(全四卷)を出版して

草川 昇

はじめに

「類聚名義抄」(るいじゅみょうぎしやう)——一般にはあまり馴染のない書名ではあるが、わが国最古最大の漢和辞書としての価値は極めて高く、原本系と広益本系との二種類がある。

原本系。成立は十二世紀のはじめで著者は法相宗の学僧と
言われている。諸本として、清水谷家旧蔵、宮内庁書陵部現
蔵の図書寮本「類聚名義抄」法部一帖の零本がある。完全な
姿は仏・法・僧の三卷(四十部首あて)を各上下二帖に分け
た六帖仕立ての辞書であつたらしいが、現存するのは法の上
冊のみである。中国の部首分類体の漢字字書で三十卷の『玉
篇』をモデルにして漢字の単字熟語を部首分類によつて掲げ、
諸種の文献を忠実に引用してその音注釈義を付けたもので、
注には漢文や真仮名・片仮名の和訓を混じている。標出語は
三千六百余語、そのうち単字数は九五一語、残りの大部分の

熟語は『一切経音義』『法華経音義』『大般若経音義』などの
字句を収録している。多くの内典、外典から引用しているが、
仏典が多い。引用文献『倭名類聚抄』(わみようるいじゅしよ
う)の「類聚」と、『篆隸万象名義』(てんれいばんしやうみ
ようぎ)の「名義」とを採用して書名にしたといわれている。
掲載の和訓は後述の広益本に比して多くはないが、正解であ
り、多くの和訓に付けられた声点から当時のアクセントの実
態がわかる。語彙は上代語をも伝えており、貴重である。仏
典特殊辞書から一般漢和辞書への過渡期を示すもので、辞書
史、音韻史等の研究上欠かせぬものであるといえる。

現存するのは、法の上冊のみであり、仏・僧の二巻と法
部の後半が欠落しているのは残念な限りである。今後この欠
落部分が世に出ることを期待したい。

広益本系。これには、(ア)観智院本、(イ)高山寺本、(ウ)蓮成院
本、(エ)西念寺本の四本が知られている。(ア)観智院本は唯一の

れの身近な日常生活の中で使用するごく一般的な語いが実に多く見られるのである。魚類・虫類・草木などの動植物名、衣類、食べ物、食器、病名、対人関係についての呼称、官位、身体部分などの名称、家畜類など人間生活と関係の深いもの、動作を表す種々の語い、ものの性質や状態を表す語い、心情語に類する多くの語いなど、前述の観智院本「類聚名義抄」では標出漢字がおおよそ三万二千字余、延べ語数三万五千四百を数え、上代人の生活が躍動的に展開されており、実に新鮮である。専門家の間では、古典の宝庫として重視されている。

観智院本類聚名義抄の書誌について述べると、

もと京都教王護国寺、通称東寺の観智院に古くから收藏されてきた「観智院本類聚名義抄」は今から約百八十余年前の文化十年に辞書学者の伴信友が筆写して以来、研究対象として一般に広まったよう、国語の歴史的研究には必見の辞書資料となっている。この観智院本が東寺を離れて天理図書館の宝蔵に帰し、写真複製されて天理図書館善本叢書として八木書店から出版された。篇目と称する漢字の扁旁冠脚の順序を表示したのも一帖、本文は佛上・佛中・佛下本・佛下末・法上・法中・法下・僧上・僧中・僧下の十帖で合計十一帖の完本から成る。各帖とも扉・内題に「類聚名義抄」とあり、

篇目帖の末尾には本書の序文とも凡例とも見られる次のような十行にわたる説明文がある。

凡此書者為愚癡者任意抄也。不可為証矣。

立篇者源依玉篇。於次第取相似者置隣也。

於字数少者集為雜部。依類者決也。篇中

聚字者私所為也。印字雖在入部依難求入

下部。失字雖在手部依難知為大部等也。

「音」訓一字從於等也

自余字准可知之。注中多略用片^{カクカサ}。

朱音者正音也。墨声者和音也。片假名有

朱点者皆有証拠。亦有師說。無点者雜々

書中隨見得注付之不知所。追々可決之。

各帖の末に「観智院」の墨書識語があるが、本文とは別筆のようである。なお、佛上・佛下本・法上・法中・法下・僧中の六帖の巻末には「一校早」の朱筆識語があり、これは本文と同筆で、巻中の朱校の性質から推しても一旦書写した後、再び底本と比較したという意味だと思われる。

題字の大きさは一字十五ミリ四方、本文標出字は十二ミリ、和訓などの注文の大きさは約五ミリくらいである。丁数は全

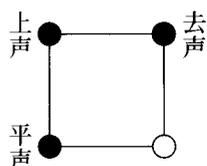
部で六五二丁、墨付本文丁数だけでも六四一丁ある。

全装十一帖の丁数・紙数は次の通りである。

(分巻) (丁数) (墨付丁数)

篇目	五	四
佛上	四九	四七
佛中	七一	七一
佛下本	七一	七〇
佛下末	三一	三〇
法上	六二	六二
法中	七八	七七
法下	七四	七三
僧上	七三	七一
僧中	七一	七〇
僧下	六七	六六

内部を縦に四段、横に八行に等分に界しており、一行分の



幅は平均十八ミリ、段の高さは平均六〇ミリ位となっている。したがって一ページに三三格あり、一格に一標出項を収めるのを原則としているが、熟語や字系連繋のあるために、また注文の長短等のた

めに常態として乱れている。何かを一括標出し、まとめて未詳としている箇所もある。本文文字は平安末期の書風が残る楷書体である。假名字体は鎌倉期のものであるにしても標出漢字は古体を伝えており威厳がある。本文は全巻同一筆ではなく、二人で分担したものと思われる。佛上、佛下本、法上、法下、僧中の筆者は同一人であり、佛中、佛下末、法中、僧上、僧下の筆者は別人のように思われる。また、朱筆による校合と、和訓に対する声付加点が行われている。声点は、上の図に示すごとく、假名の四隅のうち、左下、左上、右上（右下はまれ）に付され、それぞれ平声・上声・去声と呼び、音価は低平調・高平調上昇調であるとされている。「ニコリサケ」は「平・平濁・平・平・平」からなり、「キヨシ」は「平・平・上」、「スナホニ」は「平・上」からなっている。これによって当時のアクセント体系が推測され、国語アクセントの研究上、必須の貴重な資料となっている。また、和訓には多くの朱筆の斜線のついたものがあるが、これは校合したことを表しているようである。また、字音は、例によって見ると、「白」の音は「エ」の記号で類音の漢字「帛」で示すのが一般であり、和音については前に述べたごとく「禾」の記号で、例えば「晶」を「禾鬼」、「鳥」を「禾去」のように類

(本二)

建長參年八月六日亥尅於洛陽城鷹司之邊

一筆書寫之／畢願以此結縁世々開恵眼生

々得惣持必證大菩提矣 春秋 廿三歲

執筆沙弥顯慶

音の漢字で示しているもの、「駿」を「禾下ム」、「集」を「禾自フ」のように漢字と片仮名の両方で示しているもの、その他最も多くは「教」を「禾ケウ」、「龍」を「禾リウ」のごとく片仮名で示している。
略語として多く使用されているものに、禾(和音)メ(反切)谷(俗字)ト(部)などがあり、異体仮名には、干(ウ)＼(キ)爪(ス)尔(ネ)早、小(ホ)丁、マ(マ)ア(ミ)ム(ユ)与(ヨ)オ(オ)オ(モノ)子(ネ)禾(ネ)尔(ネ)チ(テ)禾(ワ)などが見られる。

昇
濁音符号には○または・があり、声調によってその位置が異なっている。清音は○または・である。字音の濁音を示す場合に仮名の右隅に符号を書き入れる方法も採っている。

草
佛上に凡例に対し、僧下卷々末には次のような識語がある。
書本云

仁治二年廿*九月六日於賀茂庵室交點畢凡

此書者以作者自筆／草木書寫之間文字前

後或重々定有紙繆歟尋清書之證本／追必

可交号之

この識語の内容についての詳細は前大阪外国語大学教授、現姫路独協大学名誉教授吉田金彦氏の諸論文、天理善本叢書「類聚名義抄」僧下末の解題に詳しい。

漢字々体については、正・俗・古・今・通・或などの別で示されており、特殊文字や仏典文字、あるいは難解な未詳文字をも多く収録している。漢字々体については、いわゆる旧字体の中に多くの新字体を発見することができ、現行の常用漢字表の多くの字体が平安期すでに使用されていたことに驚かされる。常用漢字々体は類聚名義抄を出典としたときえ言えよう。主なものをいくつか挙げると次の通りである。

佛 仏、僧 僧、亂 乱、堯 堯、從 從

青 青、來 來、裝 装、回 回

名義抄の和訓は日本語自身の問題であるだけに大いに興味

をそせるものがある。また、古代日本語の基本構造を明らかにする上での貴重な資料といえよう。

類聚名義抄の内容を、和訓を中心に調べていく過程の中で気づいたこと、発見したことを中心に挙げてみると次のごとくである。

筆者はかねてから日本語の疑問表現にかかわる語はI↓N ↓Dの順に変化してきたと考えているものである。すなわち、いかに・いかなる・いかでかの如きIで始まる語が最も古く、次に、なぜ・なんと・なんのの如きNで始まる形に引きつがれ、最も新しい形の、どうして・どのように・どんな・どんなふうの如きDで始まる語が今日の疑問詞の主流を占めていると考えている。

ところで、名義抄に見えているIで始まる疑問詞ならびに疑問表現にかかわる語は次の如き多くを数える。

イカマ・イカシテカ・イカスルカ・イカスルヲカ・イカソ・イカテ・イカナルヲカ・イカニ・イカハカリ・イカバカリ・イカム・イカムセン・イカムシテカ・イカムソ・イカムニ・イカン・イクソハク・イクタヒ・イクハク・イクバク・イクハクハカリ・イクバクバカリ・イクハクモナシ・イクラ

ハカリ・イツクソ・イツクソ・イツクニカ・イツクニカ・イツクソ・イツチカイヌル・イツチカユカン・イツレ・イツレ・イツレヲカアライヒイツレヲカアラハサラム

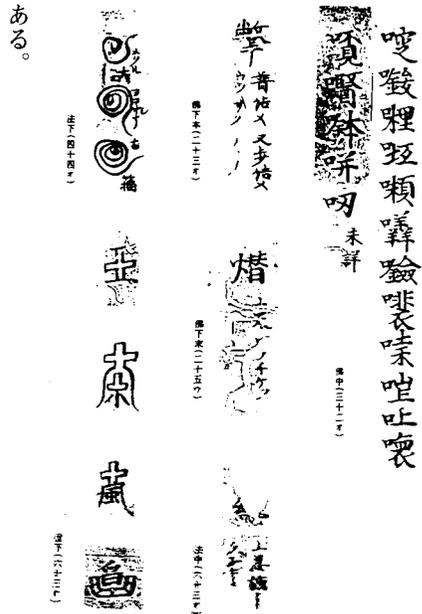
同音異字の語について多い順を示すと次の如くである。

「ツク」―付・衡・造・就・即など、延べ語い数一九五を数える。(以下すべて延べ数で表す)「ミル」―目・睨・睦・視・見など一八五語、「トル」―取・把・撮・採・拓など一七五語、「ウツ」―伐・征・叩・拍・打など一五〇語、「イタル」―至・自・向・及・格など一四〇語、「ヨシ」―仁・佳・善・祥・宜など一四〇語。

名義抄の和訓の性質上の特色は日常生活に関係の深い語が多いことである。表現が率直単純で古めかしく、上代人の生活がしのばれる。例えば、

イホノカシラノホネ 魚丁 (佛上)
 アザムキカ、ヤカス 蚩眩 (佛中)
 クソブクロ 胃 (佛中)
 カラケナハ 繩 (法中)
 シリイヅルヤマヒ 脱疔 (法下)
 サケノミツクス 醜 (僧下)
 飯カシクカナヘ 釜 (僧上)

のように素朴で洗練されていないが、実に率直そのもので



漢字未詳文字（右）、虫損のため判読困難な漢字と和訓（中）、所属不明文字（左）

漢字の未詳文字、虫損のため判読の困難な漢字と和訓、今日使用されていない、いわば所属不明の文字のいくつかを挙げたのがこれである。

漢字の未詳文字として挙げたものは、佛中の部に示されたものであるが、未詳の漢字はこのように同じ箇所一括して出されているもののほかに、単字として出しているもの、三〜四文字まとめて出しているものが随所に見られる。

次に虫損のため、判読が困難な漢字と和訓についてであるが、いちばん上の「擎」字は佛下本の部にあり、三つの和訓

が挙げられている。「ウツ」「サク」の二訓ははっきりしているが、三番目の訓が虫食いのためにはっきりしない。一語の訓であることはどうやら分かるが「ノコフ」か「ノソク」かと大体の見当はつくが、訓を断定するのは困難である。二番目の「燿」字は佛下本の部にあり、二つの和訓が挙げられている。もつとも、二つめの訓は片仮名の字と字の間が開きすぎているようであるが。はじめの訓は「ヒラチケツ」か「ヒラチケフ」のようであり、あとの訓は「ヒキユ」と考えられる。三番目の漢字は法中の部にあるが、虫損がひどく判読困難である。訓はなく、音は針のようである。一番下の字は法中の部にあり、一字の漢字で糸偏であることまではわかるが、旁が不明である。

虫損の部分が最も多いのが佛の部、続いて法の部、僧の部となっている。全体で約一七〇箇所が不明であるが、前後関係から比較的容易に判読できるものもいくつかある。例えば、佛上の部の「僧」字の訓の三つあるうちの二つ、「子□□□」の場合、□の二字が虫損箇所であるが、前後の関係から、「子ムロコ」であることが分かる。また、佛中の部の「胤」字の訓の一つに「モ□□□」というのがあるが、「モシクハ」と判読できる。ところが、法上の部の「澤」の訓のうち、「□□□□」

など三文字とも虫損がひどく、「マミル」なのか「ミユル」なのか判読は困難である。このように判読が極めて困難な虫損箇所は四〇〇五〇箇所ある。

「メクル」「ヨコサマ」「ヨコシマ」については所属不明というのとは適当でないかもしれないが、その他の文字はいずれも訓がない。興味深い文字ではあるが、この類に近い「凸」字や「凹」字のように発達しなかったであろうと思われる。

次に、和訓の特徴的なもの一つに文選読みといわれるものがある。いくつか挙げると、次の如くである。約百二十例ある。

「ト」カスカナリ	蕭條	仏上	五九
「ト」コエスキタリ	連蹠	仏上	七七
「ト」タカフ	偃僂	仏上	四四
「ト」タ、スム	俳僂	仏上	四五
「ト」タ、ズム	行	仏上	五八
「ノ」イキボトケ	神仙	仏上	二九
「ノ」カリコ	列平	仏上	一〇五
「ノ」チマタ	街衢	仏上	六五
「ノ」オホカミ	豺狼	仏下本二九〇	
「ノ」カイシキ	櫛	仏下本二八五	

漢字と仮名交りの和訓は次に示したようなもので、約二百六十例を数える。

馬クツハ	銜	仏上	六六
心モチ井	用心	仏中	二五四
心ヨシ	媠	仏中	一四二
母方ノラバ	外祖母	仏中	三九
尿フクロ	胞	仏中	二二三
鳥ノス	栖	仏下本二四八	
花ヒラク	榮	仏下末四五六	
心ミニ	嘗試	法上	六四
衣ノクビ	衽	法中	二六七
火クラム	霍乱	法下	三六三
山ノイモ	山芋	僧上	四二
飯カシクカナヘ	釜	僧上	一四四
唐ス、ミ	連雀	僧中	二九〇
母方ノオホヂラヂ	從舅	僧下	二六六
母方ノラヂ	舅	僧下	三六六

漢字のみで書かれた、いわゆる漢字訓については正宗敦夫編の「類聚名義抄第二巻 仮名索引」ではとり上げていない。漢字訓についての論考には名古屋大学の田島麻堂教授のもの

があるが、和訓の中に取り入れるべきか、単独に扱うべきか、問題もあり、今後の検討課題としたい。

和訓の掲出状況についても、慎重に判断しなければならぬものが多くある。標出漢字の明らかに異なると思われるところに出しているもの、同じ訓を二度又は三度と重出しているもの、一定の間隔を置いて、離して書かれており、あたかも二訓（二語）のようではあっても、一語の訓とするのが妥当だと思われるもの、逆に、一語の訓のように離さずに続けて書かれてはいるが、明らかに二訓（二語）と考えられるものもある。

又、標出漢字と訓とが結びつかない、不可解なものもある。原典（祖本）のままなのか、書写者の誤りなのか判然としないうが、和訓と反切注記と思われるものを取りちがえたと思われるもの——例えば「カ丁メ」は「カ^{リキ}万メ」という反切注記であるが、これを「カマメ」という和訓（？）として扱っている如きものである。この例については、正宗索引でも「カマメ」という和訓としている。——も少例ではあるが見られる。

いわゆる、誤字訓と思われるものも四本それぞれに見られ、どの本が多く、どの本が最も少ないかということは軽々には

いえないようである。

三

私が今回、『¹¹類聚名義抄和訓集成』を世に問うのは、昭和五十年に国語学会で研究発表したとき、熱心にご指導くださった大阪外国語大学教授（現姫路独協大学名誉教授）の吉田金彦先生から「興味深い書物に『類聚名義抄』があり、和訓の宝库として国語学史上貴重ですよ。あなたの恩師である中田祝夫博士の「類聚名義抄使用者のために」の一文を読むことをおすすめします」と教わったのがきっかけであった。早速風間書房刊行の『類聚名義抄』を手にし、数多い和訓に魅せられた。

専門的な知識に乏しい不安はあったが、天理図書館善本叢書（八木書店刊行）の『類聚名義抄 観智本』『三寶類字集 高山寺本』を求め、両書に所収されている和訓のカード作成にとりかかった。その後、すでに未刊国文資料別巻として刊行されていた『鎮国守国神社蔵本 三寶類聚名義抄』が新しく再刊されたのを機に、名古屋大学文学部教授 田島毓堂博士を中心に発足した「名義抄を読む会」のメンバーの一人として参加させていただき、勉強の機会を与えられたのは貴重な体験であった。「名義抄を読む会」で底本として使用

していた『鎮国守国神社蔵本 三寶類聚名義抄（蓮成院本）』の和訓カードも加え、すでに刊行されていた『図書寮本 類聚名義抄』所収の和訓についても、カード化を進めた。あと一本、『類聚名義抄 西念寺本』については、天理図書館に通いカード化した。

すでに「図書寮本」「観智院本」については総索引が刊行されており、「高山寺本」についても一部分の索引がある。また、声点付の和訓については望月郁子氏の索引が広く知られている。残念ながら「蓮成院本」「西念寺本」の二本については公開された索引がない。五本の名義抄が対照できる索引の必要性、特に唯一の原撰本である図書寮本の和訓と、改編本諸本との和訓の比較を知りたかったので、その旨中田先生に話したところ、先生から「『五本対照 類聚名義抄和訓集成』の出版を企画してはどうか」とご教示いただいた。編著書名とさせていただいた所以である。

厚かましくも、恩師である筑波大学名誉教授の中田祝夫博士、訓点語学会会長で、いつもご指導ご教示いただいている東京大学名誉教授の築島裕博士にお願したところ、早速ご序文をいただいた。両先生に深く感謝したい。

四 類聚名義抄五本所収語彙の数的検討

『五本対照類聚名義抄和訓集成』では、すでに和訓総索引が刊行されている。「図書寮本」「観智院本」の二本、一部分の索引のある「高山寺本」のほか、未刊行の「蓮成院本」「西念寺本」二本の和訓索引を作成し、五本の和訓を一覧対照できるようにした。

和訓カード作成については、原本模写の際すべてのカードに原本複写の和訓を貼付して正確を期し、カードも五種類に色分けした。

改編本系四本が共通して和訓を掲出するのは、百二十篇目中、僅か十一篇目に過ぎず、表2に示したとおりである。

（カードの一例、観智院本）



(表3) 観智院本と蓮成院本の掲出文字数の比較

「僧」部首	観本	蓮本	蓮本のみ
八十一 艸	1596	660	7
八十二 竹	492	488	1
八十三 力	106	106	0
八十四 刀刃	240	229	1
八十五 羽	103	101	2
八十六 毛	102	101	1
八十七 食	214	212	0
八十八 金	681	644	2
八十九 へ	81	81	0
九十 爪	54	73	19
九十一 网	122	119	1
九十二 皿	111	108	1
九十三 瓦	120	120	0
九十四 缶	41	41	0
九十五 弓	102	99	0
九十六 於	72	72	0
九十七 矢	37	33	0
九十八 斤	59	57	2
九十九 矛	39	37	3
百 戈	126	114	4
百一 欠	123	122	1
百二 又	85	81	1
百三 支	225	217	1
百四 彡 彣	81	80	1
百五 皮	88		
百六 革	220		
百七 韋	54		
百八 車	233	64	2
百九 羊	79	79	0
百十 馬	293	276	1
百十一 鳥	533	504	11
百十二 隹	93	87	1
百十三 魚	377	343	4
百十四 虫	660	618	42
百十五 鼠	60	59	0
百十六 龜 鼈	40	38	0
百十七 鬼	75	72	0
百十八 風	111	113	3
百十九 酉	209	200	0
百廿 雜	1502	1156	49(13)
	9639	7604	161(125)

(表1)

「仏」	掲出字数	観本	蓮本	高本	西本	
一 「人」	865	845 [○]	*231 [○]	848 [○]	*739 [○]	7
二 「彳」	182	181		179	182 [○]	
三 「彳」	441	440	*375	422	437 [○]	9
四 「匸」	55	55	54	54	55	
五 「走」	178	178	176	178	178	
六 「麦」	89	89	89	89	89	
七 「一」	139	138	121	121	133	16
八 「丨」	69	69	61	64	68	5
九 「十」	80	80	77	79	80	1
十 「身」	81	78	78	80 [○]	78	
十一 「耳」	128	128	125	127	128	1
十二 「女」	529	517	498 [○]	514	*157	2
十三 「舌」	33	33	32	33		
十四 「口」	1022	1011 [○]	919 [○]	984 [○]		22
十五 「目」	454	452	435 [○]	447 [○]		3
十六 「鼻」	36	36	36	36		
十七 「見」	128	125	126 [○]	125		1
十八 「日」	551	547	519 [○]	524		20
十九 「田」	159	159	153	157		2
廿 「肉月」	124	120	119			
計	5343	5281 [○]	4224 [○]	5061 [○]	2324 [○]	89

○……………重出の掲出字数

*……………蓮本「人」の途中～「彳」のすべて、「彳」のはじめを欠く

*……………西本「人」のはじめ109字、「女」の159字以下すべてを欠く

欄外の数字…蓮本、高本が共通して欠く字数

(表2) 四本とも掲出する字数、及び和訓総数

	四本共通和訓掲出字の和訓総数				和訓掲出字数	掲出字数
	観本	蓮本	高本	西本		
一 「人」	220	212	214	224	79	135
三 「彳」	903	870	875	886 [○]	210	366
四 「匸」	72	72	73	73	21	53
五 「走」	150	144	147	148	57	176
六 「麦」	17	18	17	17	12	89
七 「一」	259	251	250	259	84	119
八 「丨」	93	89	87	92	35	59
九 「十」	165	158	158	166	47	76
十 「身」	51	52	50	52	17	78
十一 「耳」	146	145	142	141	60	125
十二 「女」	207	198	202	205	77	153
	2283	2209 [○]	2215	2263 [○]	699	1429

観智院本と蓮成院本の比較<十〇…傍訓を示す>

僧 中					僧 上					部首	
計	皿	网	爪	△	計	羽	刀	力	竹	項目	
368	111	122	54	81	941	103	240	106	492	観本	掲出文字数
381	108	119	73	81	924	101	229	106	488	蓮本	一致するもの
301	90	102	45	64	957	77	161	67	352		掲出文字の相違
5	3	1	0	1	45	3	7	5	30		和訓の相違
32	10	8	4	10	104	14	31	14	45		他の相違
27	6	10	5	6	130	9	35	24	62		和訓掲出文字数
177	47	57	29	44	449	55	122	59	213	観本	和訓総数
181	46	56	38	41	417	49	109	58	201	蓮本	一致する和訓数
425 + 11	117 + 1	116 + 5	49 + 1	143 + 4	1025 + 35	145 + 5	319 + 11	198 + 10	363 + 9	観本	二訓以上の掲出数
427 + 12	115 + 3	113 + 4	64 + 1	135 + 4	962 + 34	133 + 4	288 + 13	195 + 11	346 + 6	蓮本	順序一致の和訓に掲出
384 + 9	106	109 + 4	43 + 1	126 + 4	850 + 23	114 + 3	261 + 8	182 + 8	293 + 4		掲出せず
77	21	24	7	25	194	28	59	36	71	観本	掲出位置の相違
81	21	23	12	25	183	25	54	34	70	蓮本	
57	17	18	5	17	126	17	38	26	45		
48	16	3	12	17	70	0	16	11	43	蓮本	
21			19	2	13	2	1	1	9	観本	
8	3	3		2	30	4	12	1	13	蓮本	
20	3	6	11		69	6	12	1	50		

完本である「観智院本」の百二十篇目に次ぐのは、五十九篇目を掲出する「蓮成院本」であるが、そのほとんどは「観智院本」の「僧」の部である。表3は「僧」部の二本の掲出文字数を比較したものである。

各本の掲出字の総数は次の表1のとおり「蓮成院本」は「イ」のすべてを欠き、「西念寺本」は「女」の途中まで、「舌」以下すべてを欠く。「高山寺本」は「肉月」以下すべてを欠く。従って、四本とも掲出する字数、及び和訓総数は表2のとおりである。

異同の大きい部首は「艹」「金」「爪」「車」「馬」「鳥」「魚」「虫」「雜」で、「皮・革・韋」の三部首を「蓮成院本」は欠く。「蓮本のみ」の数字は、「観智院本」の欠く掲出字数を示す。「爪・鳥・虫」の三部首の蓮本のみ数字が目立つ。「雜」の四十九のうち、三十六文字は、「仏」「法」のいずれか、「僧」の雑部以外の部首中にあり、観本にないものは十三字のみである。

次に、「観智院本」の「僧」篇の中から、僧上、僧中、僧下より各四部首、計十二部首を抽出して両本の掲出文字、和訓

(表4) 12部首抽出による

総計	僧 下				
	計	風	鬼	龜	鼠
1595	286	111	75	40	60
1587	282	113	72	38	59
1193	235	86	59	34	56
60	10	3	5	1	1
149	13	12	0	0	1
178	21	9	8	3	1
721	95	42	25	8	20
688	90	38	24	8	20
1640 + 51	190 + 5	116 + 5	41	11	22
1573 + 50	184 + 4	110 + 4	40	11	23
1405 + 50	171 + 2	98 + 2	40	11	22
301	30	17	9	2	2
295	31	17	9	2	3
207	24	11	9	2	2
155	37	13	9	2	13
39	5	5			
47	9	3	3	2	1
126	37	17	5		15

掲出文字、和訓総数などを比較したのが次の表4である。

表5は、「観智院本」「蓮成院本」のみに掲出されている和

訓の数を示したもので、前者が六十訓、後者が十五訓あるこ

(表5)

観智院本と蓮成院本の和訓の特色——十二部首抽出による——

羽	刀	力	竹	
7	10	4	19	観本のみ の訓
		2	1	蓮本のみ の訓
			8	

皿	岡	爪	へ	
2	4	3	7	観本のみ の訓
				蓮本のみ の訓
1	1		1	

風	鬼	龜	鼠	
4				観本のみ の訓
				蓮本のみ の訓
1				

とを示す。

表6は、五本の掲出和訓数を示したものである。「観智院本」

の仏上、仏中、仏下本、仏下本、法上、法中、法下、僧上、僧

中、僧下を基準とし、各篇目ごとに各本の掲出和訓数を記載した。空欄はそれぞれ、その篇目を欠くことを示している。

60
15

(表 6)

		五本の掲出和訓数の比較									
		親智院本	蓮成院本	高山寺本	西念寺本	図書寮本	備考				
仏上	人	一六三二	四三三	二六一〇	一三九一		蓮本「袋」の次から脱 西本「偈」から掲出				
	行	五〇四		四九五	五一六						
	走久	九九五	八五〇	九五九	一〇〇三		蓮本「进」				
	走	六六	六五	六八	六八						
	走	一四四	一三九	一四五	一四三						
	走	一六	一八	一六	一六						
	一	二六二	二四二	二四四	二六三						
	一	九八	八五	九〇	一〇二						
	十	一六九	一五五	一六四	一七二						
	身	五二	五一	五〇	五一						
仏中	耳	一四三	一三五	一三八	一四〇		西本「妓」の次から脱				
	女	五九五	五四一	五八七	二〇六						
	舌	四〇	三八	三九							
	口	一〇三六	九一二	九七五							
	目	四二一	三九一	四〇一							
	鼻	三一	三一	三〇							
	見	一四〇	一三七	一三八							
	日 日 日 是	七八八	七二三	七四四							
	田	二〇七	一九四	二〇二			蓮本「舳」の次から脱				
	肉 月	七二八	一三九								
仏下本	舟 舟	七六									
	骨	五四									
	角	七〇									
	貝	三二四									
	頁	一五二									
	多	四一									
	影 長	一一一									

僧上	竹	艸	寸	卓	斗	子	歹	鹿	广	广	广	口	門	雨	穴	勺	六	、	米	禾	示	法下	衣	糸	巾	心	上	阜	篇目	
	三六五	一七〇七	八九	一六	一六	九九	一四八	二二三	三〇	四〇三	九一	二四二	一〇〇	三三二	二二五	二二九	二二七	五二〇	二二三	一九二	三七九	二八五	三四六	八九二	一一五	一三七六	四九九	四六四	観智院本	
	三五〇	五七六																											蓮成院本	
																														高山寺本
																														西念寺本
																								一一五	二八三	六四	一六七	一〇八	一六五	図書寮本
																														備考
		蓮本「庵蘆子」から掲出																												

篇目	観智院本	蓮成院本	高山寺本	西念寺本	図書寮本	備考
僧下	二八〇	二二七				
魚	三二九	二八二				
虫	二二	二二				
鼠	一〇	一〇				
龜	四〇	三九				
鬼	一一四	一〇七				
風	一七二	一五七				
西	一一七九	八三二				
雑	百二十篇目	五九篇目	一九篇目	一二篇目	一七篇目	
	三五、三八五	一四、九七三	七、一一四	四、〇八二	一、一一二	

※「図書寮本」の「篇目頌法」には二十篇目をあげているが、次の三篇目(面・齒・色)は不出。

次に、唯一の原撰本である図書寮本を改編して掲出字と和訓を大量に増補した、改編本を代表する完本の観智院本の掲出和訓と図書寮本のそれとを比較した。表6からわかるとおり、図書寮本は観智院本の「法上・中」二帖(「水」衣一部)に相当する一帖の零本であるので、この部分について両本を比較した。

観智院本の八三一六語に対して、図書寮本は二二二語で、観智院本は約四倍に近い和訓を増補したことがわかった。最初は、和訓数の少ない原撰本に掲出の和訓を改編本はすべて収載し、更に大量に増補したものと単純に考えていたが、両本の和訓比較の結果、和訓数の少ない図書寮本の二八〇語を

観智院本が欠いていることがわかった。その内訳は次のとおりである。

篇目	和訓数
水	51
ン	5
言	23
足	24
立	1
ト	3
山	5
石	8
玉	12
邑	7
阜	5
土	23
心	48
巾	6
糸	35
衣	16
	280

平成十二年二月十六日から清書を始め、十月二十二日に書き終えたのであるが、常に心掛けたことは各本の掲出漢字、和訓、声点などをそのまま正確に写すことであった。

写しながら疑問に思う点も多くあった。例えば、観智院本の場合、同一和訓が篇目の違いによって声点異なる例が多

かったことである。『巻一』では、八ページの「縣」の和訓が
仏下本^{三〇}では「アカタ」「アカタ」法中^{二五}では「アカタ」、
一〇ページの「周章」の和訓が仏上^{八四}では「アハツ」僧
下^{四五}では「アハツ」など。観智院本、高山寺本の二本が声
点を付している和訓が多いのに、蓮成院本のみ声点を付して
いないのが目立った。観智院本と高山寺とを比較してみると、
声点の一致する和訓、異なる和訓がそれぞれ多く見られた。
西念寺本の和訓の声点の位置は妥当性を欠いている。書写者
は声点そのものの意味を理解しないで付したと思われるもの
が多かった。

今回の『^五類聚名義抄和訓集成』(全四卷)作成に際して、
次に示す諸先学の著書、論考に学ぶ点が多かった。学恩に感
謝したい。

中田祝夫

〔類聚名義抄使用者のために〕

〔類聚名義抄仮名索引漢字索引第二卷〕

築島 裕
宮澤俊雅

〔図書寮本類聚名義抄仮名索引〕

〔図書寮本類聚名義抄解説索引編〕

築島 裕

〔国語史料としての図書寮本類聚名義抄〕

〔図書寮本類聚名義抄解説索引編〕

長島豊太郎

〔類聚名義抄仮名索引漢字索引第二卷〕

吉田金彦

〔解題〕

〔天理図書館善本叢書 類聚名義抄観智院本 僧〕

小松英雄

〔日本声調史論考〕

望月郁子

〔類聚名義抄四種声点付和訓集成〕

望月郁子

〔類聚名義抄の文献学的研究〕

平成十三年五月